シャンタルと デリックと トロイが、トリスタンの 家に 遊びに 来ました。今日は、デュプロで 遊ぶのです。

「わたし、デュプロの タワーが 作りたいな。お父さんが 作り方を 教えて くれたの。」と、シャンタル。

「ぼくも、いっしょに 作るよ。」と、トロイが 言いました。

まもなく して、シャンタルと トロイは 赤と 黄色の デュプロで、自分たちの 身長ほども ある 高い タワーを 完成させました。

「タワーが できたわ。すごいでしょ？」と、シャンタルが みんなに 言いました。

「うわあ！」　トリスタンと デリックが 声を 上げました。

「ぼくたちも、消防署を 作ったよ。」と、トリスタン。

シャンタルは かがんで、消防署を よく 見ました。
「とっても すてき。」

「じゃあ、いくよ。１、２の・・・３。」　トロイが 声を 上げました。

「どういう こと？」と、シャンタル。

その時、シャンタルが トロイと いっしょに 作った タワーが、ガッシャーンと 音を 立てて たおれました。

「トロイ！　どうして タワーを たおしちゃうの！」
シャンタルは わっと 泣き出しました。

ジェイクおじいちゃんが 部屋に 入って 来ると、デュプロは そこら中に 散らばり、シャンタルが すわって泣いていました。

トロイは、わけが 分からないと いった 顔を しています。こしには、トリスタンの 工具ベルトを していました。そこには おもちゃの のこぎりや、ドライバーなどがおさめられています。手には プラスチックの とんかちを持っていて、それで タワーをたおしたのでした。

ジェイクおじいちゃんは、デュプロを よけながらトリスタンの ベッドに 行って すわりました。「トロイ、一体 どういう ことだ？」

トロイが 言いました。「いつかは こわさなくちゃいけないでしょ、おじいちゃん。」

「だけど、今 作ったばかりなの。」　シャンタルがすすり泣きながら 言いました。

「タワーが そのままじゃ、デュプロの バケツに入らないでしょ。だから、片付ける時には バラバラにしなくちゃ いけないんだ。それを、今すぐに やっただけだよ。」

「なるほどな。確かに、いつかは タワーを 片付けなくちゃ いけない。だが、分解するには、そのためのタイミングって ものが あるんだ。」

「それって、なあに？」と、トリスタン。

「つまり、それに ふさわしい 時が あるって ことだ。お前は シャンタルと、たった今、タワーを 作り終えたばかりなんだろう？　シャンタルは、片付ける 前に、それで遊びたかったんじゃ ないのかい？　そのことを 考えてみたかい？」

トロイは 頭を 横に ふって、下を 向きました。「意地悪でこわしたんじゃ ないよ。」と、トロイ。

「分かっているよ。別に、おこって いるんじゃ ない。ただ、次は この 教訓を 思い出すと いい。クラッシャーとブレーカーの ようにね。・・・」

積極思考建設会社は、古い 家を 解体する 仕事をうけ負って いました。人が 住むには もう 安全では ないので、新しい 家を 建てるためです。すでに、年配の 解体ボールが何時間も 働いていました。巨大な 鉄の ボールを たくみにゆらし、かべに ぶつけて くずすのです。くずされた かべは、大きな がれきや 小さな がれきに なります。さて、解体ボールは 仕事が 終わったので、休けいを 取りにその場を はなれました。

解体ボールが 出て行くと、今度は クラッシャーと
破砕機の ブレーカーが 入って 来ました。積極思考建設会社の
監督さんは、何を しなければ ならないのかを 説明しました。
「かべや がれきの 一部は、まだ 大き過ぎて トラックには
積めない。だから 君たちに、それを 小さく くだいて
ほしいんだ。まもなく、ブルドーザーの ドウザーと
ダンプカーの ディーが 来て、その がれきを がれき置き場に
持って行って くれる。じゃあ、よろしく 頼むよ。」

「分かりました！」　クラッシャーと ブレーカーが
元気よく 返事すると、監督さんは 出て行きました。

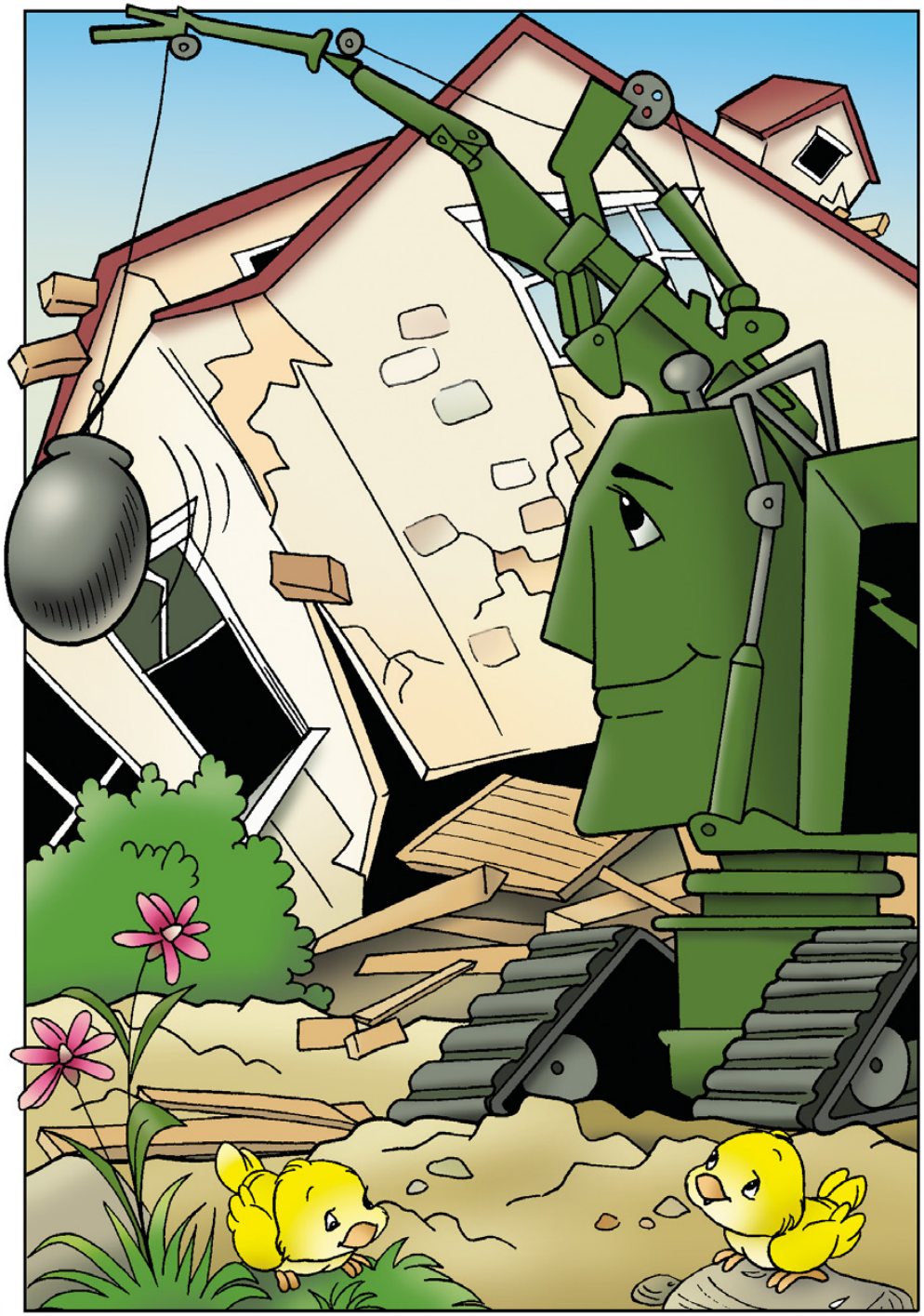
この 仕事では、クラッシャーは コンクリートの かたまりを
大きな 歯で かみくだき、ブレーカーは がれきを 小さく
くずすために、ドリルで 穴を 開けます。

「クラッシャー、どうして ぼくたちって、いつも こんな
小さな 仕事しか もらえないんだろう？　本物の 仕事が
したいよ。」と、ブレーカーが 言いました。

「そうだな。他の みんなは いつも 働いているが、
ぼくたちは ひまが 多くて つまらないもんな。」
クラッシャーも ぐちを こぼしました。

「この 仕事が 終わったら、他に 何か できる ことが ないか、
見て 回らないか？」

「それは いいな。まずは、この 仕事を 始めないと。
ドウザーと ディーが やって来るぞ。」



ブレーカーの ドリルが 回転し始めると、工事現場中に
大きな 音が ひびき渡りました。クラッシャーの 歯が
がれきを くだく 音もです。まもなく して、仕事は
終わりました。

「ここからは、ぼくたちが 引きつぐよ。ご苦労様。」
ディーが 2台の 解体兄弟に 言いました。

「ここからは、ぼくたちが 引きつぐよ、だって？
そんな ことは 聞きたく ないね。建設重機たちは
みんな、ぼくたちよりも すぐれていると 思ってるんだ。」
あざ笑うように、クラッシャーが つぶやきました。

「積極思考建設会社の みんなに、ぼくたちだって 役に
立つんだって ことを 見せて やろうじゃ ないか。」と、
クラッシャー。

「そうだな。ぼくたちだって、いい 解体コンビなんだ。
ぼくたちが 建設できないからって、それが 何なんだ？」

2台の 兄弟は、他に 何か 解体する ものは ないかと、
工事現場を ガタガタ 移動しながら 見て 回りました。

「この かべは どうだい？」　家の うら側に 立っている
低い へいを 差しながら、ブレーカーが クラッシャーに
たずねました。

「それは いいね。」と、クラッシャーが 言いました。
「ぼくたちだって、建設重機たちと 同じくらい すぐれている
ことを、みんなに 見せて やろう。」

ドリルで いくつか 穴を 開け、何度か かみくだくと、
かべの 一部が くずれました。クラッシャーと ブレーカーは、
ほこらしげに 自分たちの 仕事ぶりを 見ていました。

「大変だ！　たった 今、がれきを どけたばかりなのに・・・。
あれあれ、かべが こわれてるよ！」　小さな 掘削機の
ミニショベルが さけびました。

「ぼくたちが かべを 解体したのさ。」と、クラッシャーが
言いました。

「だけど、この かべは こわす はずじゃ なかったんだ！
かべが こわれないように、周りの がれきを きれいに
片付けるようにって、ぼく、監督さんに 頼まれたんだよ。
また かべを 作り直さなくちゃ いけなく なっちゃった。」と、
ミニショベルが 言いました。

クラッシャーと ブレーカーは、悲しそうに 地面を
見つめました。

「何か 問題でも あるのかい？」と、解体ボールが
たずねました。こわれた かべを 見ると、何が 起こったのか
分かりました。

「ぼくたち、役に 立つと 思って やったんだ。」と、
ブレーカー。

「そうか。だけど、まちがった ことを するくらいなら、
何も しない ほうが いい 場合も あるんだ。君たちには、
わたしと 同様、解体するという 特定の 仕事が ある。
だが、何でも かんでも 解体すれば いいって わけじゃ ない。
そうで ないと、他の 者達が 長い 時間を かけて きずいた
仕事を 台無しに して しまうじゃ ないか。」

「ごめんなさい。」と、クラッシャーが 言いました。

「わたしも、若い ころには 同じ ことを してしまった ものだ。それに、わたしが しでかした ことは、もっと でかかった。元に もどすのにも、ずいぶんと 時間が かかったよ。

君たちは 両方、必要と されて いるんだ。自分では 他の 重機たちほど 役に 立って いないと 思っていても、チームの 一員じゃ ないか。みんなが それぞれ、自分の 役割を 持って いる。君たちも、大切な 役割を 持って いると いう ことだ。」

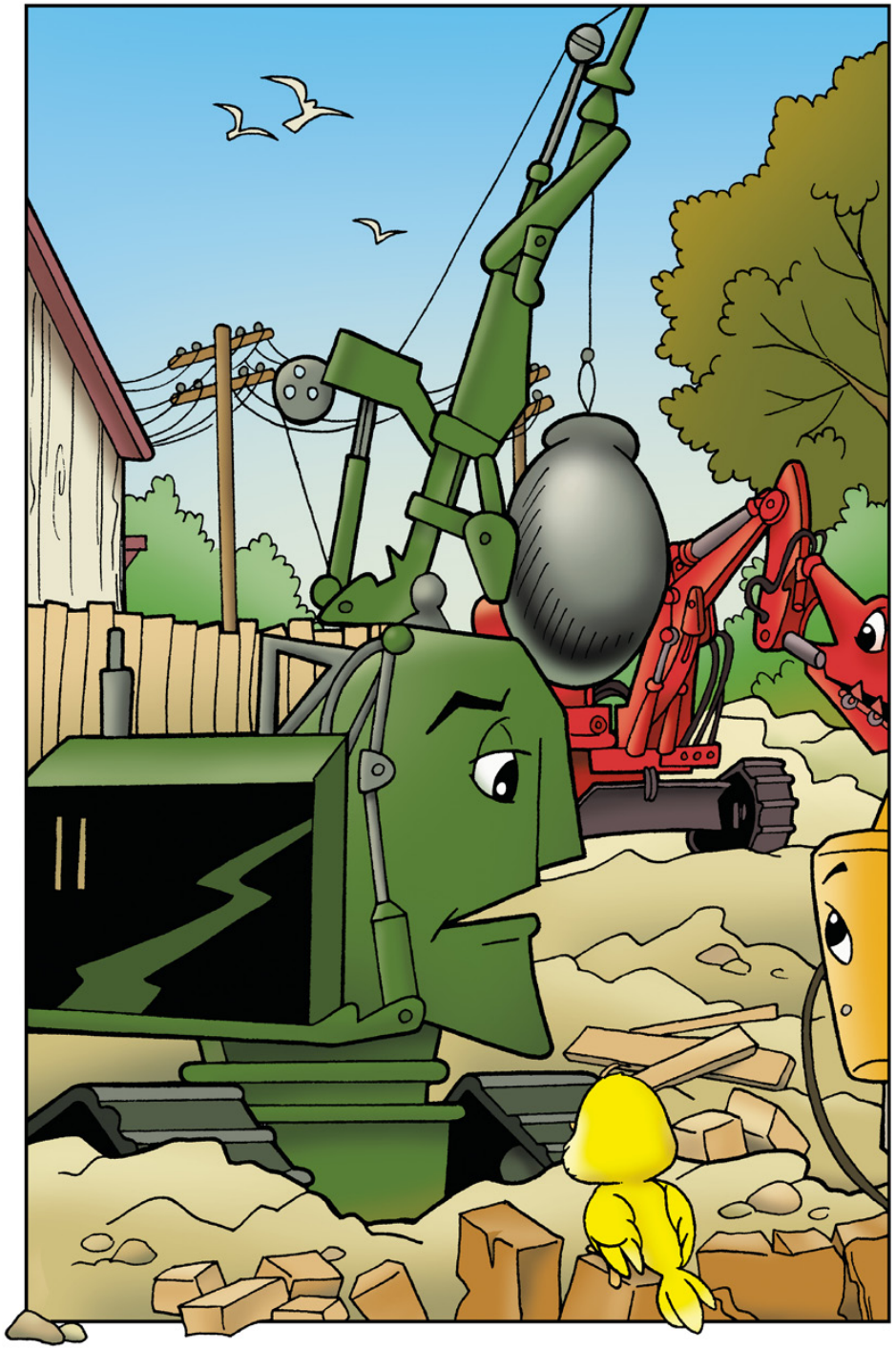
「この 教訓を、しっかりと 覚えて おきます。かべの ことは、悪かったね、ミニショベル君。」　ブレーカーが あやまりました。

「だいじょうぶだよ。直せるから。」と、ミニショベル。

「この ことを、監督さんに 話さないとね。どうしたら 直せるか、教えて くれるよ。」と、クラッシャーが 言いました。

「きっと、分かって もらえるさ。」と、解体ボールも 言いました。

2台の 兄弟は、起こった ことを 監督さんに 話しに 行きました。監督さんは 理解を 示し、2台が 良い 教訓を 学んだ ことを 喜んで くれました。



「そうだな、君たちが もっと 役立って いると 思えるような 仕事を さがして あげよう。今まで あまり 大した 仕事が なくて、悪かったね。」と、監督さんが 言いました。

「いいんです。お役に 立てるなら、どこでも 喜んで お手伝い しますよ。」と、クラッシャーが 言いました。

「シャンタル、よかったら、タワーを 作り直して あげるよ。さっきは 悲しい 思いを させちゃって、ごめんね。」と、トロイが 言いました。

「いいのよ。わたしも、いっしょに 作るわ。タワーを 作るの、楽しいもの！」　シャンタルも 言いました。

「問題を 解決したようだね。君たちを ほこりに 思うよ。」と、ジェイクおじいちゃんが 言いました。

トロイと シャンタルは、散らばった デュプロを かき集めて タワーを 作り直しましたが、今度は さっきよりも、もっと 大きくて、すてきな タワーが できました。

教訓：きずくのに 時が あり、こわすのにも 時が ある。
何を するのが 正しいのか 分からない ときは、
おうちの 人や 先生に 聞こう。

文：カチューシャ・ジュスティ　絵：アグネス・リメア　彩色：ダグ・カルダー　デザイン：ロイ・エバンス　掲載：マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2008年、オーロラ・プロダクションズAG、スイス、不許複製
“Grandpa Jake’s Storybook: Crew and Co.: Not Now!”--Japanese